

6. 生活様式としてのアーバニズム

パークの理論の基本線——人口の集中が社会解体をひきおこす。シカゴ・モノグラフも社会解体＝社会病理論の鋳型にはめられていく。

やがて、ワースの論文「生活様式としてのアーバニズム」(Wirth 1938)に継承される。(コミュニティの存続や都市下位文化の形成といった側面は切り捨てられる)。



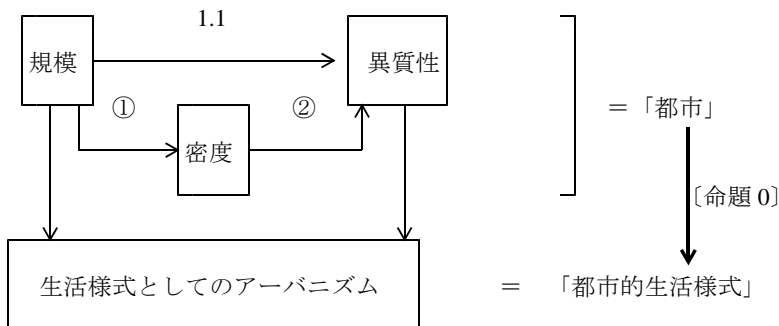
(1) 理論構造

- 「都市」が「生活様式としてのアーバニズム」を生み出すという「都市効果」理論。
- 「都市」とは「社会的に異質な諸個人からなる、相対的に大きな・密度の高い・永続的な居住地」。つまり、規模が大きく、密度が高く、社会的異質性の高いコミュニティ。
- 「生活様式としてのアーバニズム」とは、このようなコミュニティに特徴的な生活様式。

「規模が大きければ大きいほど、密度が高ければ高いほど、また異質性が大きければ大きいほど、よりアーバニズムと結びついた特徴は促進される」。

※アーバニズムとは、本来、「都市生活」の意味。ワースの場合、都市に特徴的な生活様式を「生活様式としてのアーバニズム」と呼ぶ。

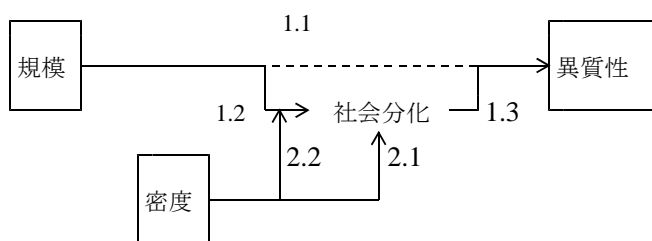
図A 基本的変数間の関係



①ワースは述べていないが、規模(人口量)が増大すれば、密度が増大するのは定義によって明らか。

②「密度」は「規模」とともに「社会的分化」を促進することによって「異質性」を増す。この点については、命題 1.1 を含めて、以下に別出する。

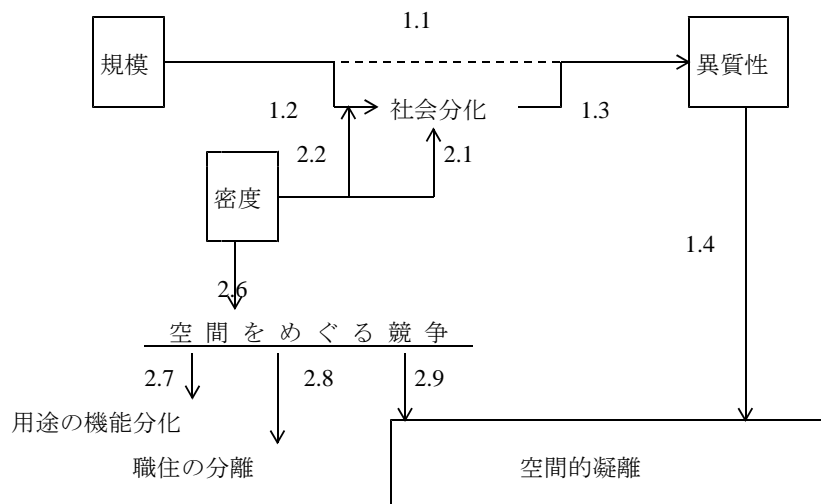
図A' 異質性の位置づけ



(2) 生活様式としてのアーバニズム

- 規模の効果：大量人口の相互作用→社会的分化（社会的異質性の増大）→空間的凝離。
匿名性→人間関係の分節化→親密で個人的な「第一次的關係」の弱体化
→表面的で非人格的な第二次的接触が優勢に。
→無関心・憤み・飽き、世間ずれ、合理性などの都会人の社会的性格。
→自由と解放、参加の感覚の喪失。
職業の専門分化・企業組織の発達（←人口規模の結果としての大市場）。
都市生活は市場に依存し、不安定になる。
マスメディアの発達、代表制の発達。
- 密度の効果：空間をめぐる競争→用途の機能分化・職住の分離。
階級別・人種別の住み分け→さまざまなライフスタイルの併存→相対主義
・相違への寛容。
物理的には近接しているが社会的には疎遠な接触様式。視覚的認識が優位に。
人工の世界への感覚が発達し自然からは遠ざかる。
愛着のない、孤独で、フラストレーションにさいなまれる個人。
競争・出世・利用の精神→無秩序への傾向。フォーマルな統制が必要となる。
- 異質性の効果：多様なパーソナリティによる相互作用→社会階層の複雑化と流動化→社会集団に一時的に分属→個人の原子化・流動的大衆の形成。
分業と大量生産の出現→生活様式の平準化。マスメディアによる政治過程の大衆化。
- 空間的凝離（職住の分離、人種別・階級別の住み分け、多様なライフスタイルの併存）。
→バージェス以来の都市生態学の伝統。

図B 空間的凝離



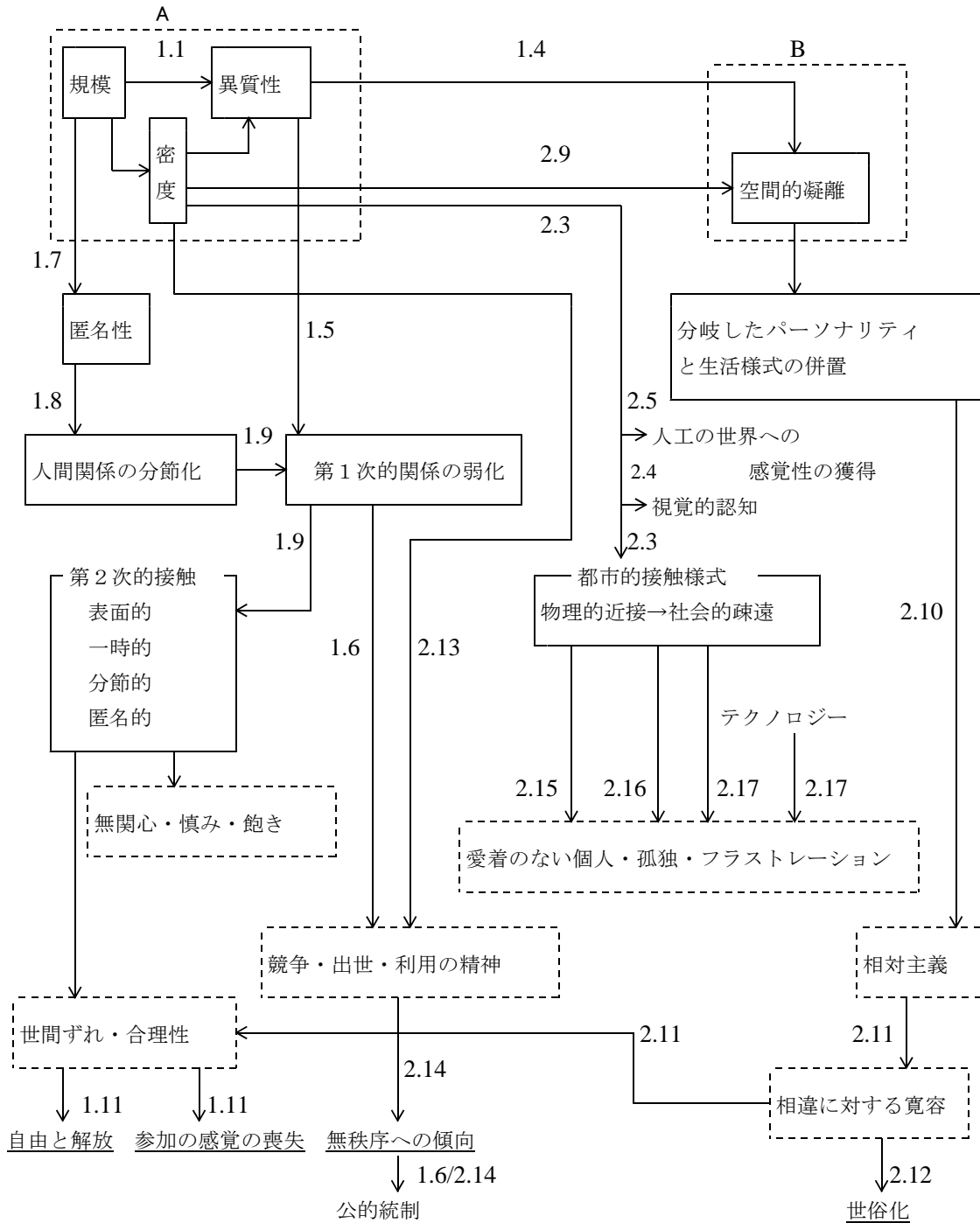
●都市的社會關係（親密で個人的な第一次的關係の衰退と表面的、一時的、非人格的な第二次的關係の優位、）。

→トマス、パーク、バージェスと引き継がれてきた、社會解体論（コミュニティ衰退論）。

●都市的パーソナリティ（無關心・慎み・飽き・世間ずれ・合理性・世俗主義・愛着のない個人、孤独、フラストレーションなど）。

→ジンメル、パークなどの議論を再現。

図C 都市的社會關係と都市的パーソナリティ



●分業の発達と大衆化（流動的大衆の形成、集合行動、生活様式の平準化、マスメディアの発達、大衆政治）

→ 1930年代の都市大衆社会を描き出す。（大量生産・大量消費時代の幕開け）。

図D 分業の展開と大衆化

